

【報告】

STS Network Japan 春のシンポジウム 2016 報告	p. 2
STS Network Japan 夏の学校 2016 報告	p. 8
2015 年度 STS Network Japan 総会報告	p. 21
2016 年度 STS Network Japan 総会報告	p. 23

NEWS LETTER

2016 年度 - 2017 年度合併号 vol.27

STS NETWORK JAPAN

STS は Science, Technology, and Society の略称です

STS Network Japan 春のシンポジウム 2016

人文・社会科学研究をどのように評価するか

菅原裕輝（大阪大学 CO デザインセンター）

平成 27 年 6 月に文部科学大臣が各国立大学に対して「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」の通知を行って以降、人文・社会科学のあり方や役割を再考する流れが国内で一層強くなっております。大学における人文・社会科学（教育）の問題がとりわけ活発に議論されていますが、その問題の背後には、多様性に開かれた人文・社会科学（研究）の内容・質を評価することが工学系研究や自然科学系研究に比べて難しいという「人文・社会科学研究の評価」に関わる問題があるように思われます。

本シンポジウムでは、人文・社会科学の現状についての多様な理解を得るべく、各学問分野に特有の事情を踏まえた上で、「人文・社会科学研究をどのように評価するか」について再考しました。パネル・ディスカッションでは、それぞれの話題提供を踏まえたうえで、「人文・社会科学が持つ多様性を維持したまま、人文・社会科学研究に対する本質的な評価は可能なのか」といった論点について掘り下げて行きました。

話題提供 (A) 「各分野の状況と今後のヴィジョン」の登壇者（笠木雅史氏 [哲学（分析哲学）]・菅原裕輝 [哲学（科学哲学）]、太郎丸博氏 [社会学（社会階層論・社会学方法論）]、藤田耕司氏 [言語学（進化言語学・生物言語学）]、駒井章治氏 [心理学・神経科学]）には、以下の論点を中心に、各分野の事情を織り交ぜながら話して頂きました。

(1) 人文・社会科学を巡る現在の研究評価基準：現在、それぞれの学問分野においてどのような研究評価基準が用いられているか（例：自分野の発展の基準、国際的展開の基準、学際的拡が

りの基準、科学技術の発展への貢献の基準、社会的要請への応答の基準、など）。

(2) 現在の研究評価基準への批判：(1) に対して、どのような批判が行われていると認識しているのか。

(3) 現在の研究評価基準に対する検討：従来の研究評価基準に問題があるとすれば、それは何だと考えるか。

(4) 今後のヴィジョン：今後、研究評価基準を改善するとすれば、どのような研究評価基準が望ましいか。

(A-1) 笠木・菅原講演「哲学研究評価の現状と課題」では、国外においてなされている様々なバイアス（名門バイアス、ジェンダーバイアス、人種バイアス）を排除し公正な評価を行おうとする試みを紹介しつつ、日本国内の哲学教員に関して発表者が行った調査結果（職位の分布、男女比、年齢の分布、出身大学院・出身大学の分布、内部出身者の割合など）を報告して頂きました。(A-2) 太郎丸講演「日本社会学における評価：私の印象」では、社会学の変容とそれに伴い、評価基準も公的な評価の重要性が認識され、わかりやすさの重要性が増大したという変化が起きたことを指摘されました。(A-3) 藤田講演「進化言語学・生物言語学の場合」では、ご自身が専門とされる学際的な分野を事例に、人文・社会科学系の評価基準を自然科学系の評価基準に吸収するのではなく、両者を統合する新しい評価基準の必要性を述べられました。(A-4) 駒井講演「心理学・神経科学の場合」では、基礎系の心理学と応用系の心理学で評価される要件が異なることや、「心理」

を評価することの難しさが心理学研究の評価をより難しくしている点が指摘されました。

話題提供 (B)「支援者・評価者の視点」の登壇者(前波美由紀氏[公益財団法人サントリー文化財団]、有本建男氏[科学技術振興機構研究開発戦略センター/政策研究大学院大学])には、それぞれの実践的観点から「人文・社会科学をどのように評価するか」という問題に切り込んで頂きました。(B-1)前波講演「サントリー文化財団が活動を通して目指すもの」では、研究評価の場面においてはサントリー文化財団の理念を共有し「学芸」を持つ方を選ぶ過程の重要性が指摘されました。(B-2)有本講演「人文学・社会科学への期待：転換期の科学技術政策の視点から」では、現代を転換期として捉え、転換期においてこそ歴史・社会・思考の枠組みを基礎づける人文学・社会科学が有用性を増していることが指摘されました。

パネル・ディスカッションのセッションでは、隠岐さや香氏[歴史学(科学史)]より20分間の指定コメントを頂いたあと、平川秀幸氏[科学技術社会論]よりコメントを頂き、パネル・ディスカッションへと移行しました。

今回は人文・社会科学分野のごく一部の分野の研究者しか呼び出すことが出来なかったため、人文・社会科学における研究評価の多様性を理解するという目的を十分に達成することは出来なかった部分もありますが、それでもなお幾つかの分野の間における違いを記述出来た点においては多少の前進はあったと思われます。今後は、今回のようなシンポジウムの形に拘らず、様々な分野の研究者を集めた人文・社会科学評価のネットワークを進めていきたいと考えております。

なお、本シンポジウム開催にあたっては、会場確保や懇親会手配など実務に係る多くの面で中村征樹氏(大阪大学)にご尽力頂きました。記して感謝致します。

*** 質問付箋とその回答 ***

なお今回のシンポジウムでは各発表に対する質問時間を

設けない分、短い休憩の時間を各発表の間に挟み「質問付箋」を通してコミュニケーションをとるという方式を採りました。質問付箋に対して回答を頂いた分を以下に掲載致します。

(A-1) 笠木・菅原講演に対する質問付箋と応答

(回答者) 笠木雅史

[質問付箋1] 論文の引用率が採用後から数年以内に上がってこない理由として、評価されるのに時間が掛かるということはないか? もしそうでないなら、きちんとした論文の評価となる基準を作るべき(バイアス云々に関わらず)と思います。

[回答1] 発表で紹介した研究では、2年間、5年間、また数10年単位の引用率の比較でも違いが現れませんので、評価されるのに時間がかかるということは、この研究からは言えないと思います。また、この発表で強調したように、基準の作成は、多様性の尊重やバイアスの再生産にならないように行うことが非常に難しいです。人文系の引用率の低さは、いろいろな理由があると考えられますので、それを分析することで、公正な評価について新しい視座がえられるかもしれません。

[質問付箋2] 単著については、分野間のちがいがあると思います。歴史では国内外問わず単著は重視されます。哲学でも大陸と分析系で違うのではないのでしょうか。分野の文化的背景の考察が必要かもしれません。

[回答2] 分野間でどのような評価基準が用いられているのかという共時的かつ記述的な観点、その評価基準がどのように形成されたのかという通時的かつ記述的な観点、そしてどのような評価基準を今後用いるべきかという規範的な観点は、区別して論じる必要があるでしょう。通時的かつ歴史的な観点に関して言いますと、分析系、大陸系といった哲学内部の分野の相違よりも(このような区別は、少なくとも国外ではあまり哲学研究の現状を捉えられなくなってきています)、国、研究機関、学会などの研究評価体制の慣習や大学の人事評価体制が大きく関与していると思います。また、例えば分析哲学でも、北米の大学人事評価体制により、単著が重視される部分もあります(研究大学でのテニュア審査には単著が重視される)。また、発表で指摘したように、日本の単著重視は、理系では評価

されないサラミ出版が一部の文系では評価されるという評価基準の分裂を招いています。記述的な調査と同時に、公正な評価システムを求める規範的な観点からの努力は行わなければいけないと考えます。

【質問付箋3】ポストに対して博士前期・後期の学生数が多いか少ないか。どうお考えでしょうか。バイアスよりも雇用・ポスト数の問題では？

【回答3】就職が困難であるかどうかは、当然求職者と雇用数の比率によって測ることができます。しかし、分野にもよりますが、その困難さに、ジェンダー、人種、専門、出身大学などで極端な相違が存在するというデータは数多くあるため、公正な就職状況となっていないというのが発表の内容でした。

【質問付箋4】哲学というのは学問的進化のメカニズムがないのか（マートンテーゼ）

【回答4】マートンテーゼそのものが議論の対象ですので、それへの言及は避けます。学問の進化というものをどのように考えるかも非常に難しい問題です。本発表で言及したような、多様性の重視というのは、進化を考える一つの視点であると思います。

【質問付箋5】客観的評価は高効率化の表れ。責任をもって「人」が評価するべき

【回答5】効率化と責任は相反するものではないと考えます。また、人による評価は、多様な専門分野を全部公平扱うことができないため評判に基づくものに陥りやすく、またバイアスの影響も避けられないというのが、現在データを元に指摘されていることです。このような指摘を受けて、よりよい評価システムを構築するにはどうすべきかということ、アカデミア全体で考えていかなければいけません。

【質問付箋6】海外における哲学分野の、①業績の評価の仕方、②人事評価の実態はどうなっているか？何を重視し得ているか？日本との違いは？

【回答6】海外での人事評価については、テニュアトラックの有無、そこからのテニュア審査など、日本とシステムが異なる点も多く、一口に説明するのは難しいです。北米では研究大学のテニュアトラック職をえるためには近年ある程度の業績が必須とされています。ここでの業績は基本的に査読付きのものに限られ、雑誌の中でも採択率などでラ

ンク分けが存在します（哲学の主要分野のトップ誌は採択率が5%を切り、トップ20以下でも10%を切ります）。しかし、出身大学や分野によっては、ほとんど業績がなくてもテニュアトラック職をえることができる場合もあり、名門バイアスや分野による競争率の格差が問題になっています。その後のテニュア審査では、教育、その他の活動への貢献以外に、継続的に論文を査読付き雑誌に掲載しているか、また単著を出版しているかどうかなどが厳しくチェックされます（単著の出版も、著名な学術出版社は専門誌同様の査読を課します）。

日本の人事評価については透明性が少ない上、ほとんど情報公開がなされておらず、この質問にお答えすることができません。就職の際の評価に関しては、データで示したように、出身大学が非常に大きなウエイトを持っていると言えます。

【質問付箋7】評価バイアスへの問題提起には慎重さも必要では？閉鎖性は問題だが、人社縮小論の標的にされないように……

【回答7】ある対象（人、機関、学術分野など）の不正さの指摘が、業界全体に対してマイナスに働かかもしれないという可能性を根拠に、その指摘の公開を抑圧するという行為は、これまで内部告発やハラスメントの告発を抑圧するロジックとして使われてきました。そのため、このようなロジックが社会的不正義の正当化に繋がるということの危険性は、十分認識されなければなりません。

私自身は、むしろ積極的に分野の評価体制の公正化、評価体制の透明化を計ったほうが、業界全体に対してポジティブな効果をもつのではないかと考えています。とくに、こうした方向性は海外では大きな動きになっており、今後の国内のアカデミアが国際化を進めるならば、こうした観点を重視していくことが必要になると思います。

【質問付箋8】多様性の欠如は「つぶし合い」以前の問題。建設的・発展的に「つぶし合う」ための土壌をいかにつくるか？

【回答8】公正化、透明化をより強調するとともに、そうした指摘、研究をする人が安全にそれをおこなえるような環境をまず作る必要があると考えます。その

ような環境の整備が遅れていることが、明示的、非明示的バイアスの存在、ハラスメントが是正されない現状を招いているのではないかと考えられます。

[質問付箋 9] 日本の哲学の教員の高齢化が顕著であることを示されたが、今後日本におけるこの分野はどうなってしまうのか？ また、人文社会系軽視が政府から言われているが、それに対して対策を持っているか？

[回答 9] この問題に答えることは、未就職の一研究者には非常に難しいです。また、研究評価の公正化という本発表の話題と直接関係しているわけではないと思いますので、ここでお答えすることは控えたいと思います。

[質問付箋 10] 今の年齢構成は再生産されるのか？（将来もこのままか？ 変化するのか？）

[回答 10] 人文系ではポスト削減が問題になっており、全体として任期無し常勤教員数が縮小されています。今回の調査の数字は、任期付き教員も数に入れていますが、今後任期付き教員の割合の増減は、予測するのが難しいです。また、30代、40代の教員の少なさは、彼らが大学院を修了した時期に定年の延長が実施されたこととも無関係ではないでしょう。一部の大学では、年齢構成を採用基準に取り入れているところもありますが、これが公正と言えるかどうかとも検討される必要があります。

[質問付箋 11] 研究者にとって「評価」＝「人事的評価」なのか？ 大学における人社系のポジショニングという意識はないのか？

[回答 11] 本シンポジウムのテーマは、研究評価基準でしたので、それについて発表させていただきました。分野や制度によって、評価基準がどのように異なっているのか、また異なるべきなのかということは慎重に議論されなければなりません。分野内評価のみでも、公正な評価を行うことは難しいですが、分野間で公正に比較可能な基準を作成することは、それに輪をかけて難しいでしょう。もし現状の分野間比較が不公正に行われているとすれば、それは是正の対象となるでしょうが、単にポジショニングというだけでは、分野外の人を納得させることは難しいと思います。おそらく、ポジショニングというよりは、研究分野の多様性ということを強調することで、研究環境の健全化、プロダクティビティの向上が行えるということを立証していく必要があります。また、ポジショニングの重視は、特定分

野の、あるいは特定の研究テーマの研究者がヘゲモニーを確立する過程で起こります。分野内、分野間を問わず、多様性を阻害することなく、公正に人的リソースを分配するような体制をいかに築いていくかが重要になると思われます。

[質問付箋 12] 名門バイアスは当然なのは。学生数が違うと思います（大学院の規模）

[回答 12] 大学院の規模については、経験的調査が必要です。しかし、日本の哲学科教員の場合、出身大学以外に就職可能なのがたった2校の出身者にほとんど限られており、これら2校の出身者数が他の大学出身者数の合計以上ということもありそうにないため、大学院の規模では説明できない偏りが存在します。また、発表で示したように、関西、関東の教員の出身大学の偏りの差は、大学院の規模では全く説明できません。

(A-3) 藤田講演に対する質問付箋と応答

[質問 1] 学際領域という研究が様々な所で広がっていますが、その中で自然科学系・人文社会科学系（と呼ぶのが良いか分かりませんが…）の研究者が適切な形で交流するにはどうすれば良いとお考えでしょうか。

[回答 1] mutual understanding、mutual respect が大切だと思います。まず、他分野の人と協力しないと取り組むことができない研究テーマを持っているかどうかで考え方が大きく違ってきます。特に文系にありがちだと思いますが、自分一人でやれるテーマであれば、その中にずっと閉じ籠もっていても不自由なことはありません。しかし、自分の専門分野だけではどうにも太刀打ちできず、他分野との協働が必須であるテーマであれば、自ずと学際的にならざるを得ません。その際、まず共通の問題意識を持ち、互いの専門分野や研究成果に敬意を持って、知見を分かち合おうとする謙虚さが求められます。学際的な領域にあっても自分の専門分野が一番重要だ、などとは思わず、すべての分野を対等に位置づけて情報を交換し合うことです。そのためには、それら他分野のことが理解できるよう自分も進んで勉強し、相手の専門領域に切り込んでいって質問や批判をし合えるだけの基礎知識を持つ必要があります。それがいやだ、自分の分野だけに籠

もって楽しみたい、また他分野の人に自分の分野を荒らされたくない、という考え方が文系に比較的多いように思います。自分の専門分野だけであれば大きな顔をしていられるが、それができなくなるのがいやだ、と思う人もいでしょう。そのような縄張り意識を捨てられるか、捨てても取り組みたいと思う研究テーマを持っているか、です。

[質問付箋 2] 学際性、国際性を重視した評価も理解できる一方で、国内で研究が深まって専門化が促進されるという意味で、専門性、国内研究重視という評価にも一理あるのではないか。

[回答 2] 学際性と専門性は対立するものではなく、自分の専門分野において優れた研究ができない人は、学際的な研究の場においても役に立ちません。まずそれぞれがその専門分野において第一級の研究者であること、それを互いに認め合い尊敬し合うことが必要です。国際性と国内研究重視の関係については、やはりその研究テーマによるという気がします。極端な場合、日本人しかやっていない、できないテーマというものもあるでしょう。私個人としては、日本人研究者の優れた研究を国内だけにとどめておくのはもったいない、世界に発信して日本人研究者がいかに優れているかをアピールしたい、誤解を恐れず言えば、その分野の先頭に日本人が立つことで学術の世界で我が国の国力強化や国威発揚につなげたい、という思いが強いです。国際化はいわゆるグローバル化・無国籍化とは違うと思っています。

[質問付箋 3] 新領域への提案のようなものが採択されるような新しいファンディング制度が必要

[回答 3] その通りですね。科研費の審査制度の改革も進んでいるとのことで、よい方向に向かうことを期待しています。

[質問付箋 4] 海外とは一コースの総時間数が違い、教育のモデルとすることが難しい。教育をどうしたらよいのか。正直解決案がない。(主要著作も英語ならいくらでもあるが、日本語ではあまりない)

[回答 4] 特にセメスター制(あるいは「ターム制」)になってから、専門科目をじっくり教えることができなくなり、中途半端に終わってしまうことが多くなりました。それ以前から、我が国では学部の早い段階からいきなり専門的な

ことをやって、ある程度理解が進んでから視野を広げ、分野の包括的な位置づけを理解させることが多かったように思います。これは米国などとは逆です。学部レベルでは日本人学生のほうが難しいことを知っているが、大学院レベルになるとあっという間に逆転するという印象を持っているのですが、基礎体力の違いかも知れません。大学の講義だけでは不十分なのは明白で、あとはやる気のある、そして優秀な学生が自分でどれだけ努力できるか次第という心許ない状況だと思いません。

[質問付箋 5] 「活動」に対する評価も大切ですよ。社会への視点

[回答 5] 研究成果の市民への還元、アウトリーチ活動重視、といった点でも文系は積極性を欠いている人が多いように思います。自分にしか分からない自分だけの世界をむしろよしとする伝統のせいもあると思います。

[質問付箋 6] 大局観を有する評価者の育成に何が必要か？

[回答 6] 1つは、その人自身が研究者としてそのようなことをやってきたかどうかを厳しくチェックして評価者(例えば新学術領域のような大型科研の審査員)を決めるべきだと思います。現役時代には大した選手でもなかった人が評論家になると偉そうなことを言うというのが野球などにはありますが、学術の世界では、一流選手であったことが評論家の第一条件となるべきだと思います(それだけではだめですが)。

[質問付箋 7] 文・理系が分かれているのがそもそもおかしいとおっしゃっていましたが、人社の新学術に出され続けたのはなぜか

[回答 7] これは単純に、計画の代表を私が引き受けたからであって、私自身の専門は文系の言語学に分類されているからでした。しかしもう人社には見切りをつけるつもりです。

(後日談(2017年10月7日追加):今年、岡ノ谷一夫さん(東大、生物心理学)を領域代表にして複合領域に申請したところ、ちゃんと採択された。やはり人社に見切りをつけて正解だった。)

[質問付箋 8] 「評価の対象にならない」とのことですが、学会による（おける）評価、職場における評価…など、どちらの評価でしょうか。

[回答 8] 職場でいうと、私の所属する部局は学際性や異分野融合をウリにしているのですが、実体はそれとはかけ離れているという印象を受けます。それではいけないからカリキュラム編成や教員採用人事でも学際性を重視すべきだと発言することもあるのですが、まあ、同調してくれる人はいませんね。ポスト配分などの既得権益を守りたいという考えもあるのでしょうか。

[質問付箋 9] 論文編集者、シンポ開催、アウトリーチ、どう評価するのがよいと思われますか？ →各大学での評価が妥当では？

[回答 9] 文系と理系で重視される成果が違っているということもありますが、最大公約数的なことを言うなら、peer review の著名国際ジャーナルに論文を載せていること、海外研究者にも評価され引用されていることが最低ラインだと思います。それを満たさない人、国内で日本語でしか論文を書いていない人でも大きな顔ができる分野が文系には多いと感じます。

[質問付箋 10] 人社の審査について。「どうせ自分のためなんでしょ、その研究」というレッテルを「文系」にだけ押しつけるのは非常に良くない。ですよね？ そこに非対称性を感じますか？

[回答 10] 文系には「自分のための研究」をむしろよしとする風潮があるように感じます。理系も実は「自分のための研究」なのかもしれないですが、それだけではいけないという意識と、そうではないように見せる技術があると思います。

[質問付箋 11] 個人に対する評価と共同体（分野）に対する評価は、どのような共通点・相違点があるとお考えですか？

[回答 11] 私のやっている生物言語学・進化言語学のような新興領域の場合、まずその領域に既存の分野から優れた人を引き込む必要があります。これに抵抗を感じ、既存分野に閉じ籠っていたい人も多いのですが、その際、既存分野でも高い評価を得ており、人望もあるような人が先導役になってくれるとよい効果が期待できます。まず個人への評価があり、分野への評価が後、ということが最初の段

階ではあるだろうと思います。また、新興領域だけではどう評価していいのかわからない場合も、その人がすでに既存分野で傑出した業績をあげている人であるなら、よくわからないがあの人やっているならきっと重要な領域なんだろうと思ってもらえる面もあると思います。その後は、新たに参加した人たちがどれだけ評価されるようになるかです。しかしそれよりも、現在のところ、この分野で学位を取れる大学が国内にはない、世界的にも少ない、仮に取れたとしてもその後の進路が確保されていない、というのが最大の問題です。これを改善しないと、若い人の新たな参入を期待することはできません。すでに身分が安定している人がさらに専門分野を拡げて終わるだけになってしまいます。

[質問付箋 12] 招待講演は評価対象にならないのか？

国内規準だとなってもおかしくなさそうだが…

[回答 12] 部局内の自己評価や活動レビューで、招待講演数を書くようにはなっていますが、その結果を受けて何かあるということはないようです。

(A-4) 駒井講演に対する質問付箋と応答

[質問付箋 1] 内容より論文の言語が異なるのは興味深い。評価を適切に行うためには内容と母語の必要性について考察する必要があると思うが、心理学は有用な知見を提供できるのではないかと。

[回答 1] 基礎科学と応用科学の有り様に似ているのではないかと。違うからといって分離するのは容易だが、心を扱う学問と応用は互いに理解しあう努力は必要。今回は評価の問題であるので、あえて比較したが、学問体系としては分離すべきではない。

[質問付箋 2] プロフェッショナルスクールとアカデミックスクールにおける人材育成の差をどう考えるのか

[回答 2] 上記回答と同様の内容。

科学を表現する、科学で表現する

木村匠・宮本道人（東京大学大学院）

「科学技術社会論 夏の学校 2016」を
考える
—参加者の声、アンケート結果から
分析する「夏の学校」—

「科学技術社会論 夏の学校 2016」企画局長
木村 匠（東京大学大学院）

はじめに

STS Network Japan(以下「NJ」)では毎年夏になると、「夏の学校」と称したイベントが企画・開催される。この「夏の学校」は、初回開催の1994年度から2015年度まで、NJの主催で実施されてきた。しかし、このような「伝統」に逆らい、2016年度の「夏の学校」では「科学技術社会論 夏の学校実行委員会」が別途組織され、この実行委員会のもとで企画が練り上げられた。その結果、2016年度の「夏の学校」は多様な参加者を迎えるイベントになり、例年にも増してユニークな特徴をもつものとなった。2016年度の「夏の学校」はどのような点においてユニークだったのか、そしてそれは、科学技術社会論にとってどのような意味をもつ催しだったのか。本報告では、「科学技術社会論 夏の学校 2016」に見られたユニークな特徴について、振り返っていく。

多様な参加者

まず、多様な参加者について説明しよう。下の表1は、「科学技術社会論 夏の学校 2016」参加者（計71人（注1））の専門分野・領域を示している。この表で示している専門分野・領域を、STS関連諸領域（科学技術社会論・科学社会学・科学技術政策・科学技術メディア論・科学哲学）、自然科学諸領域（生物学・神経科学・化学・物理学・情報科学・工学・数学・環境学）、社会科学・人文学諸領域（歴史学・経済学・死生学・学習科学・シリアスゲーム・言語学・地理

学・国語・デザイン）という3つの領域に分類する（注2）と、各領域別の参加者割合は図1のようになる。ここからわかるように、2016年度の「夏の学校」には、自然科学・人文学・社会科学を問わず、様々な分野・領域から参加者が集った。また、参加者の所属や職業も多様である。図2は、参加者の所属・職業分類を示している。最も割合が高いのは「学生（学部・修士・博士）」（63%）であるが、次に多いのが「企業・官公庁・高校教員」（24%）となっている。週末を利用した開催となったことも関係していると思われるが、学生や大学教員・学術機関研究者以外にもこれだけの参加者が集ったことは、驚きであった。このように、専門分野・領域という点、そして所属・職業という点においても、「科学技術社会論 夏の学校 2016」には多様な参加者が集っていたことがわかるだろう。

専門分野・領域	人数	専門分野・領域	人数
科学技術社会論(STS)	6	歴史学	1
科学社会学	1	経済学	1
科学技術政策	1	死生学	1
科学技術メディア論	1	学習科学	1
科学哲学	1	シリアスゲーム	1
生物学	18	言語学	1
神経科学	9	地理学	1
化学	7	国語	1
物理学	6	デザイン	1
情報科学	4	専門分野なし	3
工学	3	計	71
数学	1		
環境学	1		

表1：参加者の専門分野・領域

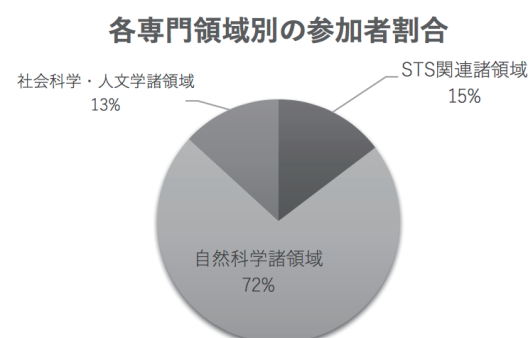


図1：各専門領域別の参加者割合

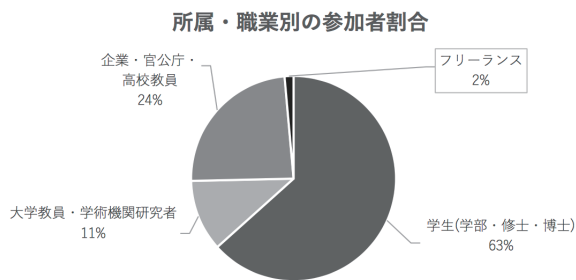


図2：所属・職業別の参加者割合

少なかった「STS 関係者」

このような参加者の多様性から何がみえてくるだろう。もちろん、各日程で実施された講演において有意義な議論が見られたことや、若手ネットワーク紹介において参加者から多数の興味深い発表があったことにも、参加者が多様であったことが関係しているだろう。しかし、ここで注目したいのは、STS 関連諸領域を専門とする参加者が少なかったことである。図1に示した各専門領域別の参加者割合を見ると、STS 関連諸領域を専門とする参加者は全体の15%であり、決してマジョリティとは言えない。つまり、この「夏の学校」では、STS 関連諸領域において常々用いられてきている（そしてときに自明のものとも考えられがちな）「欠如モデル」概念や、「トランスサイエンス」概念は決して自明のものではなかった。このような雰囲気の中で、「科学と表現」にまつわる議論が行われたのである。筆者はここで、STS 関連諸領域を専門とする参加者、すなわち「STS 関係者」の参加が少なかったことを嘆いているわけではない。むしろ、「STS 関係者」の参加者が少なくても、この「夏の学校」ではSTSが取り上げてきた、または取り上げるべきだと思われるトピックがいくつも存在していたことをとても興味深く思っているのだ。

「科学コミュニケーション」をめぐって

そのようなトピックの中から、ここでは「科学コミュニケーション」を取り上げる。まず、これは筆者の所感であるが、STS 関連諸領域において「科学コミュニケーション」という

語は主に、①主に政策や制度へ市民参加を取り入れていくことで科学・技術の社会への適切な実装を目指す営み（例：参加型テクノロジーアセスメント）、②主に個人や団体が PUS(Public Understanding of Science= 科学の公衆理解) を目指し、特定の科学・技術に関する知識を一般市民に説いていく営み（例：科学館や博物館におけるサイエンスコミュニケーター業務）という2種類の意味を持つものとして理解されていると感じる。特に近年では、リスクコミュニケーションに関する議論との関連において、①についての議論が多く行われているように思われる(注3)。そして、②については、「欠如モデル」的な見方を助長するものと捉えられてきた傾向があるように、少なくとも筆者は、感じる。それでは、2016年度の「夏の学校」において参加者の話題に挙がった「科学コミュニケーション」はどのようなものであったか。これについても筆者の所感となってしまう申し訳ないが、①についての議論は少なく、②について議論されることが圧倒的に多かったように感じる。つまり、特定の科学・技術に関する知識を一般市民に対して如何にわかりやすく、楽しく、感動的に伝えられるか、ということに主眼を置いた議論が多く繰り広げられた。このような議論が展開される様子を見て、筆者は当初面食らってしまった。何故ならば、筆者自身、日頃から①についての議論を周囲の人々とすることはあっても、②についての議論をすることはあまりなかったからである。C.P.スノーの響みに倣えば、これこそまさに（彼が言ったのとは別の意味であるが）「科学コミュニケーション」に関する「二つの文化」なのではないかと感じた。

このように、当初は「異文化」に戸惑っていた筆者であったが、参加者と個人的に話し、彼ら/彼女らが様々な悩みを抱える中でこのような「科学コミュニケーション」を実践しようとしていることを知った。例えば、ある参加者はアカデミックキャリア（自然科学領域）を目指しているものの、研究能力を持っているだけでは昨今の激しいポスト争いに不利であると認識し、「科学コミュニケーション」活動を始めよ

うと思いついたという。また別の参加者は、自らの専攻している自然科学領域は近年人材不足が叫ばれていて、その領域により多くの人々や中高生が興味を持ってくれた結果領域が活性化すれば、との思いから「科学コミュニケーション」活動に取り組んでいるという。ここから、参加者が各々様々な背景から「科学コミュニケーション」活動に取り組んでいることがわかる。参加者が吐露してくれたこのような事情は、学術界における競争力の激化や特定の学界における人材不足など、科学・技術と社会との間で生じる問題の存在を示している。そして、これらの問題は、これまでSTS 関連諸領域が扱ってきた、またはこれから扱っていくべき問題である。このように、2016年度の「夏の学校」には「STS 関係者」の参加は少なかったものの、STS 関連諸領域で扱いうるトピックが存在していた。

おわりに

これまで見てきたように、2016年度の「夏の学校」には多様な領域・所属から参加者が集った。そして、そこではSTS 関連諸領域であまり取り上げられない、「科学・技術を一般市民へ如何にわかりやすく伝えるか」に主眼を置いた「科学コミュニケーション」について多く議論がされた。しかし、このような議論が展開される背景には、STS 関連諸領域が扱い得る課題の存在があった。

このような多様な参加者が多数集まる「夏の学校」を今後も実施することには、もちろん困難も伴うだろう。例えば、多様な領域・所属から参加者を募るのであれば、それだけ多くのコミュニティや人々に対して「夏の学校」の広報活動を行う必要がある。また、参加者の多様性については、集まってみなければわかり得ない部分があるため、テーマ設定にも多大な苦労が予想される。

それでも筆者は、この先もこのような「夏の学校」が実施されればいいな、と（無責任であるが）感じる。それは、このような催しは多様な領域・所属の人々、特にこれからア

カデミックキャリアで活躍していくであろう人々にSTSを知ってもらいたい機会であるし、「STS 関係者」もまた、「STS」とは何なのかを参加者に問われ、考えあぐねながらもそれに答える、良い機会になるからだ。

以下では、プログラムごとの感想を紹介していく。

スプツニ子！先生 ご講演

多根 悦子（東京大学大学院）

現代アーティストであるスプツニ子！氏の講演では、問題を掘り起こして社会に問題提起するデザイン -design for debate- が提案され、科学と表現に関する海外の様々な事例とともに、スプツニ子！氏自身の科学とアートを融合した作品が、実際に作成された映像を交えて紹介された。神話と科学との関わりなど、今までにない斬新なアイデアに感銘を受けると共に、科学技術の急速な発展に伴い、私たちが倫理のジレンマに直面していることについて深く考えさせられ、科学と社会との関わりは今、これまで以上に密接になってきていることを実感した。

参加者からも、以下のような感想が寄せられた。

- ・ speculative design という分野を初めて知り、その問題意識を大変面白く感じました。
- ・ 芸術で問題提起をするという方法が私たちがものごとを考える良いきっかけになるなど実感できました。
- ・ 科学とアートを融合するための発想力はもちろんのこと、それを伝える力、表現力、諦めない精神がとても印象的で真似したくてもできない（でも少しでも近づきたい！）と思いました。
- ・ 科学と芸術の融合領域の仕事がしたいが、なかなか実行に移す勇気がなかった私にとって、スプツニ子！先生のメッセージはとても励みになりました。
- ・ 作品のお話はもちろんですが、研究室の学

生のアイデアや forbidden research や gene drive でマラリア蚊改変のアイデアなど、MIT メディアラボでどのようなことが話題になっているのかのお話が出来たことが楽しかったです。

・「デザイン」について深く考えたこともなかった上に、「問題提起するデザイン」というのが全く新しく、そのような意志・情報交換手段があるのかということに非常に感動した。

・科学への無条件の肯定、に見えるのがちょっと疑問であったし、「科学」なのか？ という疑問もあった。しかし、DESIGN の枠組みの中に問題解決だけでなく、問題提起も盛り込み、またそれを実践することについて識ることができたので、それについては満足している。もちろん、こうして肯定してみせることによって、ちょっと違うんじゃないの、みたいな話もあると予想はしているのだろうなと思う。繊維会社がハマった、というのには、ほかの商業への可能性も感じる。ちゃんと基礎への動線をつくることができればおもしろいし、好奇心に動かされるというのが何より大事だと思う。

村松秀先生 ご講演

木村 匠（東京大学大学院）

2 日目に行われた村松秀氏の講演では、今年度の「夏の学校」のテーマである「科学を表現する、科学で表現する」について参加者全員で再考するための視点がいくつも得られた。まず村松氏は、多くのメディアが科学について報道する際、科学そのものを伝えるのではなく、科学の「情報」を伝えているのだということ指摘した。その上で、「科学を表現する、科学で表現する」というテーマにおいて、科学がツールとして、固定的なものとして捉えられる可能性があるのではないかと参加者に問いかけた。講演冒頭でこのような指摘を聞いた私は、思わず考え込んで

しまった。確かに、科学とアートを巡る言説や作品は昨今多く存在しているが、それらの中には（誤解を恐れずに言えば）、科学ではなく、科学の「情報」、すなわち科学的活動の結果生み出されたアウトプットの伝達を主眼としているものが頻繁に見受けられるように思われたからだ。しかし、村松氏が論文捏造などの事例を用いて説明していたように、実際の科学は真っ直ぐには進まない。このような、ときに思い通りに動いてくれない科学の姿を「表現する」のに適した方法は何なのだろうか。ここで村松氏が提唱していたのが、「グルグル思考」だ。これは、村松氏が手掛けた TV 番組『すイエんサー』において、出演者たちが課題に取り組む様子を表現したものだ。同番組の出演者である女子高生アイドルたちは、自然科学について特に専門的知見を有していない、いわば素人だ。彼女らは番組内で与えられた課題（例：「あっち向いてホイで必ず勝つにはどうすればいいか？」）を解決するために、研究者を始めとする専門家を訪ね、解決のためのヒントを得ていく。その過程で彼女らは、課題解決には一見関係なさそうに見えること、無駄に見えることについても真剣に取り組んでいく。このような思考の姿勢こそ、村松氏が提唱する「グルグル思考」である。つまり、事前に存在していることがわかっている答えに向けて効率的に情報を収集するのではなく、どこにあるかわからない答えを得るために様々な知見を用いて迷いながらグルグルと考えていく過程を指しているのだ。村松氏はこのような思考法の他に、「『わからなさ』を伝えること」の重要性を強調していた。環境ホルモンをはじめとする、科学的知見が関わってはいるものの、その行く末について定かなことは誰にもわからないこと（これは STS においてしばしば言及されるトランスサイエンス問題と関連するように思われる）について、メディアはどのように伝えれば良いのかを問いかけているのだ。このようなトピックを伝える際、固定的なものとして科学の「情報」を流通さ

せてしまうと、それは混乱を招いてしまいかねない。「科学を表現する」とき、このような「わからなさ」とどのように向き合い、伝えていくかを考えていくことで、科学にまつわる表現活動はより立体感のあるものとなるだろう。

参加者からも、以下のような感想が寄せられた。

- ・科学と表現の関連性について様々な例をあげながら考察されていて、面白かったです。科学プロセスそのものを表現するという思想はとても考えさせられました。
- ・科学の知識、結果ではなく、プロセスを伝えることが大切なんだと感じました。村松さんのおっしゃっていた「グルグル思考」など、科学に関わる上での楽しさを、一般の人にも味わってもらえるような何かが作りたいと思いました。
- ・ご制作なさった数々の番組その実例をもって、「科学を表現する」とは一体何なのかという“哲学的”な考察をお聞かせいただけただけことが勉強になりました。

標葉隆馬先生 ご講演

水口 智仁（慶應義塾大学医学部医学科）

夏の学校最終日の本講演では成城大学の標葉隆馬先生より再生医療を題材に、研究者と一般の人々との間に存在する科学・技術への態度の差や、誇張的報道が生まれるメカニズムなどについて学んだ。多能性を持つヒトiPS細胞が2007年に作製されるなど、近年の再生医療関連技術の発展に伴って再生医療に関する報道件数も増加傾向にある。

しかし、再生医療の研究者と一般モニターそれぞれを対象に行われた質問紙調査によれば、研究者が伝えたいと望むことと一般モニターが知りたいと思うことの間にはズレがあるようだ。再生医療の「危険性」については、一般モニターの74.1%が「知りたいこと」に挙げたが、研究者側で「伝えたいこと」に挙げたのは53.3%にとどまった。また「事故発

生時の対応」については47.3%の一般モニターが「知りたい」としたが研究者で「伝えたい」としたのは24.8%だった。一方、研究者側で「伝えたい」と回答した割合が多かったにもかかわらず一般モニターが「知りたい」と回答した割合が低かった項目には、「医療応用や臨床試験」「メカニズム・しくみ」「産業としての可能性」などがみられた。生命科学系の学生である筆者は日常的に研究者らと接しているが、研究者と一般モニターとの間でこのような情報ニーズのズレがあることは今まで明確に意識したことがなく、少なからず驚かされた。

また講演では他にも、研究者のコミュニケーション活動への態度や参加障壁に関するアンケート調査や、研究不正やねつ造で知られるファン・ウソク事件におけるマスメディアの関わりなどが紹介された。中でも筆者にとって印象的だったのが、健康や医療に関連した科学研究の成果が報道される際、プレスリリース時点での誇張的表現の有無と報道での誇張的表現の有無が強く相関していたという調査結果である。もちろん、プレスリリース時点では事実即した表現でも、報道の過程で新たに科学的に妥当でない誇張的表現が生じる場合もあるだろうが、研究機関側が発するプレスリリース自体に過度に期待を抱かせたり不安を煽ったりするような表現が含まれていた場合、マスメディアによる報道も当然、視聴者の注目を集めるような誇張的なトーンとなることは想像に難くない。正確なプレスリリースを発することが健康関連ニュースの誤解を軽減する重要な機会を提供するとの指摘には、筆者のような研究機関側に立つ人間としては活を入れられた思いがした。

科学技術社会論という分野は筆者にとってはこれまで接点のない領域だったが、本講演からは科学研究という営為が社会の中でどう位置づけられているのかを考える基盤となる知見を得られた。特に、科学研究の成果が報道を介して人々に伝えられる過

程は、決して発信者側＝研究者が思い描いた通りになるとは限らないことを意識できたことは有益だった。今回の夏の学校には科学研究者やマスメディア関係者など多様なバックグラウンドを持つ人々が参加していたが、このような場が拡大することにより、立場の異なる人々の間で相互理解が深まるのではないだろうか。

参加者からも、以下のような感想が寄せられた。

・サイエンスコミュニケーションの難しさを感じました。科学に親しんでいるこちら側の視点にとらわれず、世間一般として、どのように科学がとらえられているのか、もっと注意して見ていこうと思います。

・大学の研究者・広報部などが、「科学を伝える」ことをどう実践しているのか、課題は何なのかを概説していただけたので、今現在アカデミアとは距離を置き消費者側ビジネスに携わるものとして学ぶところが多かったです。

・ご本人の宣言通り、他のお二方より地味ではあったが、個人的には没入して聞いた。なぜなら科学技術社会論「若手」向けの学校であるので、STSで議論されてきた基本的な事項を学ぶ場を期待していたからだ。欠如モデルなどについてガッツリ話して頂いてもよかったと思うくらいである。

若手ネットワーク紹介・参加者発表

元木 香織（横浜国立大学大学院 環境情報学 府 環境生命学専攻）

本イベントでは、参加者に科学・表現・科学技術社会論に関係するものという縛りのゆるいキーワードを与え、個人の考えや活動を話してもらう「参加者発表」を企画した。さらに参加者や運営メンバーが関わっている交流会や勉強会などの「若手ネットワーク紹介」を行った。参加者発表は1人20分程度で13名、ネットワーク紹介は1人3分程度で20

名が発表した。

「参加者発表」では事前に文章ではなく図などを用いた要旨作成を依頼した。内容は科学的な研究発表から、科学×表現のプロダクト制作やサイエンスコミュニケーションなどの活動紹介、問題提起など多岐に渡った。「若手ネットワーク紹介」は懇親会中のラフな雰囲気の中で行われ、数人規模の勉強会や作品作りを行う会から、100人規模で50年以上続いている若手会まで約40団体が紹介された。若手ネットワークの多様性を知ること大きな目標としたため、いつでも参加できる入り口の広いものから、分野や参加条件を絞った入り口の狭いものまで意図的に洗い洗い紹介された。

個人的には、本イベントの参加者と殆ど面識がないという戸惑いがあったが、自己紹介カードや上記の企画によって活発な交流が促されたと感じた。また、イベント終了後には参加者間のネットワークを持続させる目的でFacebookのグループが作られた。FacebookなどのSNSを通じて参加者同士が繋がり、共有された情報からネットワークの拡大が起こっている。

参加者の感想

多根 悦子（東京大学大学院）

初めて「STS夏の学校」に参加しました。「科学で表現する、科学を表現する」というテーマで一体どのような話になるのかと楽しみにしていましたが、理系／文系問わず多様な分野と、幅広い年齢層・肩書きを持つ参加者が集まり、議論を交わしたり情報を交換したりすることができ、さらに豪華な先生方の貴重な講演も盛りだくさんで、非常に密度の濃い時間を過ごさせていただきました。

また、参加者からのプレゼンテーションもあり、それぞれの研究分野、興味対象、決意表明などが発表され、そこからインスピレーションを得たり、コラボレーションが生まれたりして議論は深夜にまでおよび、そこ

にはネット上では味わえない熱気がありました。3日間の合宿の中で、私は1日半しか参加できなかったのですが、来年もぜひ自分のネタを持って参戦したいと思います。

その他にも、参加者から以下のような感想が寄せられました。

・スタッフの皆さんが懇切丁寧にサポートしてくださったからこそ、知り合いがほとんどいなかった私でも、参加者のほとんどといっ
ていくらい、多くの方と交流することができました。今後も、様々な分野の人が集まる機会が増えるといいと思うので、協力できることがあれば、協力させていただきます。ありがとうございました！

・『偉い方』たちを引きずり出して議論を深めて下さい。偉い方、中堅、若手の混合で対話をしてほしいです。呼称に基づく欠如モデルの強化、差別化が減るとよいかなど。



全体集合写真

注

(注1) 一部スタッフ、協賛企業からの参加者は除く。

(注2) 無論、このような分類の仕方はある意味「乱暴」なもので、便宜上のものであることを断っておく。

(注3) もちろん、「多く行われている」ことをもって、このような議論が STS 関連諸領域における「主流」であるなどと断じるつもりは、毛頭ない。

「科学技術社会論 夏の学校 2016」 運営報告 ——夏の学校はどこから来て、どんなもので、どこへ行くのか

「科学技術社会論 夏の学校 2016」実行委員長
宮本 道人（東京大学大学院）

1. 出会い

科学技術社会論という分野を知ったのは、2015年の11月だ。

「STSNJという科学技術社会論系の研究会？に現場サイドの若手にも来てほしい」（原文ママ）と、学部時代のサークル・慶應 SF 研でお世話になっていた八代嘉美先生からご連絡を頂いたのが、すべての始まりだった。

僕は大学院生として神経科学を研究する傍ら、科学文化評論家を勝手に標榜して執筆活動をしている。科学技術社会論という言葉すら聞き覚えがなかったのは恥ずかしい限りだが、これを機に勉強させて頂こうと、STSNJ 関係者数人の飲み会に顔を出した。

「この分野には若手が全然いない。ネットワークが継続できるか分からない」

のっけから暗い話を聞かされ、僕はだいぶ困惑した。しかし話を聞くうちに、何やら頼られているらしいことに気付いた。

「宮本くんは他の若手の会で色々スタッフをしている。そのノウハウを活かし、協力して欲しい」

婉曲表現に次ぐ婉曲表現を取り払うと、どうやら結論はそんな感じのようで、それでも意図を計りかねるうちに会合は終わった。そして同じメンバーと次に会った時、僕が夏の学校の実行委員長を務めることは、なかば既成事実のように扱われていたのだ。

2. 準備

こうして僕は、いきなり全く知らない学

術分野の若手の顔を務めることになった。「僕でいいのか?」と思わないこともなかったが、せっかく学術団体お墨付きイベントをデザインできる権利を貰えたのだから、アウェイならではの方法論で新しい風を吹き込んでやろうと意気込んだ。加えて、その懐の深さを意外と好きになっている自分もいた。

まず提案したのが、「STSNJ夏の学校」という名前の改変だ。そもそも最初に STSNJ を知った時、何の団体か把握できるまで結構な時間を要した。子音アルファベット五文字で読みにくい上に、頭文字が何かの単語になっているわけでもない。学問と社会との関係を考察する分野の団体が、異分野の理解を拒む名を堂々と冠していることからして、これはダメな業界だと呆れた。だから、「科学技術社会論夏の学校 2016」と名前を変えて開催することを決めた。

次は、スタッフ集めだ。科学技術社会論分野には若手がほとんどいないと聞いたわけだから、これはもう自分で異分野からかき集めるしかない。むしろその方が、異分野融合ができて良いかもしれないな。そんなことを考えながら色々な友人に声をかけていたら、いつの間にかスタッフは約 40 人集まった。ここで工夫した点は、科学技術社会論という言葉すら知らない人を入れることと、社会人を入れることだ。3点とも、イベントを内輪感覚から引き剥がすために必要な、客観的な視点を持つための大事なポイントである。結局当日参加できたスタッフは 20 人だが、裏には残り 20 人の協力もあったことを忘れてはいけない。スタッフ同士は主に Facebook メッセージャーでやり取りをして、その時々で手の空いている人が事務的な作業を進められるようにした。

開催地の決定も、並行して進めた。前述した最初の会合の際、僕と同様に知らぬ間に担ぎ上げられていたメンバー・木村匠さんが企画局長を務めてくれることになったので、初期の主な案はだいたい 2 人で練った。開催地

は、プログラムと密接に結びつく重要なファクターだ。参加者が途中で自宅に帰ってしまわないくらいの地理で、でも交通の利便性は高く、科学技術社会論っぽい要素のある地域が望ましい。相談を重ねた結果、つくば近郊に決まった。なかなか良いホテルも見つけられた。1人1部屋にできて値段も安く、広いホールもある。講演会場としてホテルのホールだけを用いると高くつくので、筑波大学も会場に用いることにした。幸いにして、僕の誘ったスタッフの中には、筑波大学の大学院生がいた。名を本多隆利さんという。彼には総務局長になってもらい、木村・本多と宮本の3人が中心になって夏学を進める体制が整った。

宣伝はウェブに注力した。ポスターを良い紙に印刷して大学等に送付・掲示するのは金と手間がかかる。スタッフに川合啓介さんというデザイナーの方が参加して下さっていたのが、絶大な効果を発揮した。ウェブサイト上の様々なビジュアルを綺麗に作って下さって、これがキーになった(もしもウェブサイトを見ていない方がいたら、「科学技術社会論夏の学校 2016」等で検索して、ぜひご覧頂きたい!)。ウェブサイトには、概要、プログラム等のほか、講師の先生方から頂いたご略歴とご講演要旨を掲載した。参加者募集の告知は、様々な若手研究者ネットワークのメリスや、Facebook上に存在する科学系イベント情報共有グループなどに流した。各スタッフ個人の SNS アカウントでの告知も重視した。ウェブメディア「サイエンスニュース」さんに記事も書かせて頂いた。公式の Facebook グループや Twitter アカウントも作成した。

参加者は 80 人を集めることに決めた。募集対象は「学生、研究者、クリエイター、ジャーナリスト、科学・表現に関心のある周辺分野の方」とし、ウェブサイトに参加登録 Google フォームへのリンクを貼った。また、ウェブサイトには「※当企画は LGBT 配慮を心掛けています」と表記した(1人1部屋にし、

参加の際に性別を聞くことも避けた等、精一杯気をつけるよう頑張った)。参加者から頂く金額は学生と一般で値段を変え、学生の負担を下げると共に、「学校」と冠されているが学生でなくても参加できることを暗にアピールした。その他の予算に関しては、STSNJには共催という形でお金を頂くことに決まったほか、企業協賛依頼書を作って何社かに依頼し、結果的に株式会社リバネスさんから協賛を頂けた。

その他細々とした準備は尽きなかったが、ここでは他に、配布資料についてだけ触れておこう。資料は「自己紹介シート例」、「しおり」、「当日配布資料」の三種を作った。「自己紹介シート」としては、自分の写真や専門・趣味などを自由に書けるフォーマットを作り、パワポのファイルとして事前送付した。これに各自記入し、数十枚印刷して持ってくるようメールで伝えた。このフォーマットには、僕自身のネタっぽい自己紹介例を載せて、参加者に自由度の高さを強調した。「しおり」には、タイムスケジュールや講演要旨の他、会場に下見に行った際の情報を載せた。会場への行き方を示す写真や地図、バスの時間帯、諸注意などである。PDFでメーリスに流し、各自印刷して持ってくるようお願いした。「当日配布資料」には、参加者の「名前、ふりがな、職業・所属・学年・役職等、専門分野、所属学会／若手の会／NPO／サークル等」(この項目は参加登録の際に記入してもらったもの。対象が研究者にバイアスしないよう項目を考えた)のリストと、参加者発表の要旨スライドを載せた。

枠組みについての準備は、ざっくりとこのような感じで進んだ。いよいよここからは、会期三日間を振り返っていこう。

3. 初日

「着いた人から、どんどん隣の人に話しかけて、自己紹介シートを交換して」

参加者には、事前にメールでこのように言っていた。イベントとは、参加者全員がアウ

エイ感を覚えるものだと僕は思っている。多くのイベントでは、早く着いた参加者はスマホをいじるか寝たフリをしていて、スタッフはスタッフ同士で話し込んでいる。これは、スタッフが解消に向けて努力すべき最初のポイントだ。開会式の前に、僕はその場にいる全員に一人一人直接話しかけて、近くに座った人に話しかけるよう促し、知らない人同士を向き合わせた。参加者が増えるとそうもいかなかったが、最初にそう促したおかげで、かなり自分から盛り上げようというメンバーが出てきてくれた。

開会式の前には、少しだけ、協賛企業の株式会社リバネスさんのためにプレゼン・資料配布の時間を設けた。なお、協賛企業の方は、泊まらないのであればイベントに自由に参加してもらって構わないということにしておいたため、会期中参加者と活発に交流していた方もいらっやって、企業と学生の良い関係が築けたのではないかと考えている。これも、インとアウェイを混じらせる一つのキーとなる。

開会式では、実行委員長でさえアウェイだという話をした。イベントという形式は、そもそもスタッフと参加者の間にカベが作られる構造になっている。そのせいで、スタッフは参加者からアウェイになり、参加者はスタッフからアウェイになる。だから、工夫がないイベントでは、自分が主体的にイベントに参加できたと感じる人は少なくなる。この夏学には、そうなって欲しくなかった。そこで、「参加者みんな、自分こそがメインスタッフだと思って手伝ってくれ。逆にスタッフは実際に金を払って参加しているわけだし、ヒラの参加者だと思って参加者と普通に話してくれ」というようなことをお願いした。

開会式の後、スプツニ子！先生が到着した。ご講演では、様々な作品のご紹介の中で関わった方々を立てていらっやったのがとても印象的で、作品が思いやりの中で生まれているんだなと感銘を受けた。先生のアートは作られる過程もアートというか、意外な交流が

生まれるプロジェクトとしての側面もあって、そこが科学業界の革新に繋がるということも改めて認識した。他にも、人の発想を変えれば世界が変わるというお話や、人類は既に数々の「うっかりシンギュラリティ」を通過しているというお話など、科学業界の内部に居るだけでは見えない、大事な勉強になった。

ご講演後、スプツニ子！先生に、参加者が直接話すことのできる機会を設けさせて頂いた。質疑応答ではなく、自己紹介シートを持って一人一人話すという方式だ。これまでの経験から、僕自身の個人的な感覚としては、イベントでトークをした際、講演者側も一方通行で得るものがなく終わってしまうと勿体無いのではないかと思っていた。講演者の中には、参加者の興味や専門分野や連絡先を知りたいという人もいるだろう。そこで今回は、ムリを承知でこの形式を取った。今回はスプツニ子！先生の前に長い長い列ができ、少々整理されていないゴチャゴチャな状態になってしまったが、先生もこの方式で喜んで下さっていらっしゃったようなので、一安心だった。

先生のお帰り後、参加者には部屋に荷物を置いてもらい、すぐにバスで筑波大学に移動した。予算削減のため、貸し切りバスでなく、公共バスに三回に分けて乗ってもらう。バスに乗る前には、バス内で自己紹介シートを交換して、知らない参加者と積極的に話すようアナウンスした。移動時は、近くに居る人が次々に入れ替わるので、友達を増やすにはもってこいのチャンスだ。

筑波大学に着いてからは、夕食懇親会をしながら、若手ネットワーク紹介を聞く時間となる。今回のスタッフは、僕が様々な若手イベントで会ったメンバーを誘ったケースがほとんどだ。なので、それぞれの所属している若手ネットワークをフランクに紹介してもらった。参加者は皆ネームプレートを付けているので顔と名前を一致させやすく、トークを終えた人に、聞いていた人がバイキング形式の食事を取る際に話しかけるような光景も見

られた。このようなパターンで、新しい若手ネットワークに加入した人もいたようだ。

筑波大学からホテルに帰った後は、ホテルのロビーで談笑した。ホテル側のご厚意で、ロビーを11時くらいまで開放してくれていたのだ。スタッフは途中、別のスペースで会議を行った。順調な滑り出しが確認できたので、僕は部屋に帰って早めに眠りについた。

4. 二日目

徐々に、全体が「かたまり」始めていた。仲良くなってきたという証拠でもあるが、これが逆に流動性を損なう場合がある。「なるべく、知らない人を選んで話しかけてみて。全員と仲良くなろう。あと、知らないと思って話しかけたら、相手は覚えていたというケースも恐れないで。ワサワサした会なんだから、忘れるのは当たり前。何度でも初対面を繰り返そう！」

暇さえあれば、マイクを握ってそんなことを叫んだ。さらに、「〇〇さんとは話しました？」と参加者に直接話しかけて、他の参加者に紹介しまくった。一度できたクラスタを分解することに躊躇してはいけない。じっくり話したい人とは、イベント後にもう一度会う約束を取り付けられればいい。自己紹介シートには連絡先が書いてあるので、それは容易だ。全く同じ参加者が全員集まるイベントというものはありません。こんな面白い人達が集まっているのに、友人になっていない組み合わせがあるのは勿体無い。だから、こうして場を乱すのが実行委員長の役割だと思っている。

肝心の企画はどうだったかの話に移ろう。参加者発表では、サイエンスショーの実演から神経科学のガチな研究発表まで、多様性に富んだ楽しいトークが繰り広げられた。自分の研究を無理やり科学技術社会論っぽい話に繋げている発表もあり、その繋げようという見方自体が1つの試みとして非常に面白かった。このような場合は、学会とは違うことを前面に押し出すのがミソである。事前の要旨提出も、パワポスライド1枚にビジュアルメイ

ンで楽しく的な感じをお願いしておいて、僕が自作したネタ要旨を例として送付していた。研究会で発表しないような内容まで話せることこそ、夏の学校の醍醐味ではないだろうか。昼食に弁当を配布したのだが、この食事の時には、発表していない参加者でも、発表の感想など持論を語りあっていったのが印象的だった。分野外だから基礎知識の欠如を盾に好き放題言えることもあり、そういう意見こそダイナミックで素晴らしい時もある。ここは研究の精密な情報交換をする場ではなく、あくまで研究の領域をふんわり広げる場なのだ。従来の学術分野の区分けでの評価体系を無視した意見交換が可能な場なのだ。

次に、村松秀先生のご講演があった。「科学を表現する」、「科学で表現する」という2つの重なりや、その枠に囚われない科学と表現の関係も考えることができ、改めて自分自身の考え方を見直す機会になった。アートがモノの見方を変えること、科学が「分からない」限界に無頓着なこと、メディアは科学を「情報の提示」的に扱っている場合があるのではないかということ、科学は結果ではなくプロセスであること、スイエンサーのグルグル思考が「科学を表現する」に繋がること。学んだことを挙げれば切りのないご講演だった。

大変有り難いことに、村松先生はご講演後もそのまま居て下さって、懇親会で乾杯の音頭を取って下さった。列をなした沢山の参加者と、一人一人丁寧にじっくりお話されていたのが印象的だった。

先生のお帰りの後、若手ネットワーク紹介の流れとなった。前日の続きである。また、スタッフ以外からも自分の若手ネットワークを紹介したいという人を募集しており、その方たちに発表してもらった。発表の途中、会場からは「この会知ってる」「ぜひ後で話したい」というような声が上がっていた。その後の様子も見てみると、うまく若手ネットワーク同士の繋がりが増えたようだった。本当に嬉しいことだ。そもそも僕は夏学をデザインするとき、色々な若手研究者のプラットフォームになるよう

に、という願いを念頭に置いていた。それは、STSNJの人たちとの最初の出会いに遡る。この原稿の冒頭部だ。僕はメンバーに「科学技術社会論とはどんな特徴がある分野なのか」と尋ねた。その回答の中に、「科学技術社会論には固有の方法論がない」という意見があった。なるほどそうかもしれない。しかし僕はその後、むしろ科学技術社会論は「固有の方法論」自体に成り得るんじゃないかと思うようになった。科学技術社会論は、研究者のモノの見方のベースとなることを目指すべきではないのか。ならば、色々な分野の若手を引き合わせ、科学技術社会論を片手に語り合うような場を作ることが、その一歩だ。この夏学の根底にはそういう狙いもあったわけだが、それはどうやらうまく成功したようだった。

二日目の夜は、やはりホテルのロビーで二次会&別スペースでスタッフ会議だ。「飲み明かすのが夏学！」みたいな若手の会は多いが、僕は飲み会の空気が苦手だ。もともとほとんど酒は飲まない。早く寝て、翌日の講演をじっくり聞きたい。飲みたい人は、最終日のプログラムが終わった後に飲みに行きたくて欲しい。参加者にも、それを推奨した。僕は実行委員長として真っ先に部屋に帰り、湯船にお湯を張ってのんびり風呂に入って疲れを取り、ぐっすり寝た。

5. 最終日

標葉隆馬先生のご講演から、最終日は始まった。科学技術社会論を専門にする研究者の方からのご講演ということで、「科学技術社会論とはなんぞや」と思っていた参加者も、かなりこの分野の役割・重大性・面白さを知ったはずだ。参加者はここまでの二日間で、実践的・現場的な内容を色々無邪気に議論してきた。理論的・客観的な見方を提示するこのご講演の後、それらを再度振り返ってみると、また違う側面も見えて面白い。

そうこうしているうちに、もう閉会式が近付いていた。実行委員長として、閉会式でなんの話をするのか、僕は悩んだ。そこで、少

し気になったことを見つけた。参加者の多くは、会期中に科学コミュニケーションの話をしてきた。科学技術社会論=科学コミュニケーション、みたいな感じで扱われていたのだ。「科学を表現する、科学で表現する」なんてテーマを選んだのだから当たり前かもしれないが、そもそも科学技術社会論という名前を本イベントの宣伝で目にするまで知らなかった参加者がほとんどであった。でも、科学技術社会論について、かくいう僕だって詳しいわけじゃない。夏学直前でも、ちゃんと理解している専門用語は「欠如モデル」くらいしか知らなかった。だから、参加者に「科学技術社会論って何？」と訊かれると、僕はとりあえず欠如モデルの話をしてきた。他にちゃんと話せるネタがほとんど無かったからだ。

まあ、正直ちょっと誇張している部分もあるが、なんかとっつきにくくてあまり理解しようとしていなかったのはホントだ。これはひどいと自分でも思う。なんで、こうなったんだ？

結論を言おう。接触のない分野を知るのは難しい。僕は、これまで色々な分野の学術イベント・若手の会に行っていたが、そこに科学技術社会論の研究者が来たことはなかった。もちろん、「科学技術社会論／科学コミュニケーション／研究倫理を教えます」みたいな場所には関係者が来ているだろうが、そういうものではない、他の研究者団体のイベントにってことだ。他の多くの分野の研究者は、若手ネットワーク同士で集まろうと頑張ったり、受け身でないコミュニケーションを模索している。

翻って、「欠如モデル」という言葉を振り回している側は、これからの科学を担う若手の院生と双方向コミュニケーションを取ってきたのか。科学技術社会論に理解のある院生としかコンタクトを取っていなかったのではないか。「STS」というそれ自体意味の無いアルファベット三文字を掲げて、その三文字に興味を持った者としてしか付き合っていなかったのではないか。「科学コミュニケーション」につ

いて考える人間に、「科学技術社会論コミュニケーション」はできているのか。科学技術社会論を、研究者と仲良く一緒に考えていこうという姿勢はあるのか。現場の若手と隔絶したカベの向こう、ジャンルが権威化してはいないか。専門用語を囲い込んで、自分たちは現場よりもメタ的な立場に立てていると勘違いしてはいないか。「研究者は科学技術社会論啓蒙を施せばマトモになる」的に考え、自分たちこそ別の形の欠如モデルに陥ってはいないか。

専門知同士の対話を、領域外の人が観察する。それが「科学を表現する、科学で表現する」ことに通じると、僕は思っている。科学技術社会論と研究者の対話を他の分野が観察する、そんな場が増えればいい。科学技術社会論は常に客観的な立場じゃなくて、現場の一つとして、その輪に混じって欲しい。友達から始めることが、何より大切だ。

閉会式では、そんな思いを、少しだけ語った。そして、語りながら少し思った。僕自身このイベントを通して、科学技術社会論とは何か、ようやく少しだけ掴んだのかもしれないな、と。

全員参加のプログラムは、これで終わり。一旦解散後、有志のみサイエンスツアーバスでつくばの研究所等を巡った。これは「任意参加プログラム」という名前にしたのだが、もともとの企画段階では「エクスカーション」と名前が付けられていた。実はエクスカーションという慣習は、他の若手ネットワークではあまり見かけないため、最初この言葉をSTSNJメンバーから聞いたときは意味がわからず戸惑った。「体験型見学会」とか言えればいいではないか。まあ、言葉の問題はどうとして、これがどうしてなかなか良いアイデアだった。コースごとに少人数ずつの班に分かれたおかげで、既に行ったことのある施設に行くことは避けられたし、何より現場を見ながら密に話げできた。

締めくくりに、収支を最終確認したり、今後の後片付けの予定を決める会議を兼ねた、打

ち上げをやった。木村・本多と宮本は他のスタッフからサプライズでプレゼントを頂いたりもして、三日間は幸せに終わった。

6. その後

さて、これで夏の学校は完全に終わったのかというと、そうとも言えない。もちろんイベント会期は終わったが、収支の後処理、アンケート、写真の管理、そしてこうして報告書の作成など、スタッフ作業は続いている。

加えて、夏の学校が撒いた種子は参加者に受け継がれ、既に芽吹き始めているのだ。例えば、ブログ「文脈をつなぐ」では、「リアル文脈ゼミ『科学技術社会論夏の学校 2016 に参加して思うこと』」と題された記事において、参加者の感想の文章のほか、会期中に参加者同士で考えたことを話す様子を動画でUPして下さっている。また、他の研究者ネットワークから、この夏学で用いた自己紹介シートの雛形を使わせて欲しいというご連絡を頂いたりもした。

閉会式の最後に僕は、「次はあなたの番だ」というようなことを、冗談めかして言った。それを、真に受けてくれた人もいた。2017年1月に開催された異分野交流イベント「ACADEMIC PARTY」は、この夏学の影響を受けていると、主催の入門学術メディアShareStudyの管理人は話していた。

夏の学校というのは、少しずつバトンを繋いでいく文化だ。今回の夏学を通し、僕自身もスタッフから、それぞれが持っている様々な科学文化のプロデュース方法を学ばせてもらった。僕も、他の夏学やSTSNJから貰ったバトンを組み合わせて、新しいバトンを作ったのだ。このバトンは、絆と信頼のバトンでもある。今回のスタッフは、これからの人生で大事な局面が訪れた時に背中を預けられる仲間になった。

僕はこの夏の学校を通して、「自分なりの新しい科学文化を作った」と主張したい。少し大げさな言い方かもしれないが、僕らは個人が軽やかに次々と文化を作って当たり前の時代に生きている。そして同時に夏の学校は、一

つの表現だ。モノの見方の提示だ。二度と同じものはできない作品だ。だからこそ、参加者には僕の「科学文化の作り方」の一部ずつを受け継いで、今後自分なりの文化をどんどん気軽に作って行って欲しい。この文章も、そんな思いで書いている。自分でも何かイベントを開きたいと思われた方がいたら、ぜひ気軽に連絡してきて欲しい。

夏の学校や若手ネットワークという生態系は、科学技術社会論的に見ても面白い存在だ。まだまだ未知の可能性に溢れている。これをうまく使えば研究業界に新しい一石を投じることができると、僕は信じている。

科学技術社会論を研究している皆さま、ぜひこの興味深い若手文化を、一緒に盛り上げていきましょう。夏の学校は、いつまでも終わらないのです。

2015 年度 STS Network Japan 総会報告

STS Network Japan 事務局

日時：2016 年 3 月 27 日（日）11 時～12 時

場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育講義 B 棟 1 階 118 教室

1. 2015 年度活動報告

(1) 夏の学校 2015「変容する世界像：科学・社会・芸術の脱魔術化と再魔術化」

・三日間を通して 60 名程度が参加。報告は NEWSLETTER Vol.26 (1) (通巻 No.77) に記載。

・企画運営：丸山善宏（京都大学）／実務の補助：菅原裕輝

2. 2015 年度会計報告（会計：中村征樹、会計監査：東島仁）

・次頁参照

3. 2016 年度事務局人事

代表：菅原裕輝 事務局長：森下翔 庶務（郵便物管理）：中村征樹

名簿管理：森下翔 Web 管理：夏目賢一 ML 管理：標葉隆馬

夏の学校実行委員：宮本道人、木村匠 ドメイン管理：中村征樹

Newsletter 編集：菅原裕輝・江間有沙

会計：中村征樹 会計監査：東島仁

企画委員：江間有沙、八代嘉美、加瀬郁子、木村匠

4. 2016 年度事業計画

(1) 春のシンポジウム 2016「人文・社会科学研究をどのように評価するか」

・企画運営：菅原裕輝／実務の補助：中村征樹

(2) 夏の学校 2016「科学を表現する、科学で表現する」

5. 2016 年度予算計画

・次頁参照

2015 年度決算

STS Network Japan 事務局

※ () 内の金額は、2015 年度予算の金額

なお、2014 年度総会～2015 年度総会前までを会計年度の区切りとしています。

【収入】(2015.9.4～2016.3.25)

前年度繰越金	716,021 円
会費	4,000 円 (100,000 円)
Yearbook 売上	0 円 (0 円)
年度小計	4,000 円 (100,000 円)
合計	<u>720,021 円</u> (816,021 円)

【支出】(2015.9.4～2016.3.25)

Newsletter 発行・発送経費	0 円 (100,000 円)
(※ PDF での配信に移行のため)	
研究会経費	0 円 (0 円)
事務局会議経費	0 円 (0 円)
シンポジウム・総会・研究会経費	0 円 (200,000 円)
(※ 2014 年度総会は夏の学校時に実施のため)	
通信費	864 円 (10,000 円)
雑費	0 円 (10,000 円)
Web 関連経費	2,916 円 (11,000 円)
(※ レンタルサーバー代)	
夏の学校補助	100,000 円 (100,000 円)
年度小計	103,780 円 (431,000 円)
次年度繰越金	616,241 円
合計	<u>720,021 円</u>

夏の学校会計報告 (作成者: 菅原裕輝)

【収入】

STS Network Japan 補助費	100,000 円
懇親会費 (一般 3500 円 × 6 名, 学生 2000 円 × 7 名, 実行委員 3980 円 × 1 名)	35,480 円
合計	<u>135,480 円</u>

【支出】

懇親会費	60,480 円
講師謝金 (林晋)	10,000 円
講演者謝金	20,000 円
※ 実行委員が依頼した講演者 4 名に, 5000 円	
パネリスト旅費	45,000 円
合計	<u>135,480 円</u>

2016 年度予算

STS Network Japan 事務局

【収入】(2016.3.25-2017.3)

前年度繰越金	616,241 円
会費	100,000 円
Yearbook 売上	0 円
年度小計	100,000 円
合計	<u>716,241 円</u>

【支出】(2016.3.25-2017.3)

Newsletter 発行経費	0 円
シンポジウム・総会・研究会経費	200,000 円
通信費	1,000 円
雑費 (封筒・文具等)	1,000 円
Web 関連費	4,000 円
夏の学校開催補助	100,000 円
年度小計	342,000 円
次年度繰越金	374,241 円
合計	<u>716,241 円</u>

2016 年度 STS Network Japan 総会報告

STS Network Japan 事務局

日時：2017 年 7 月 29 日（日）12 時 30 分～14 時

場所：日本科学未来館 7F コンファレンスルーム水星

1. 2016 年度活動報告

(1) STS Network Japan 春のシンポジウム 2016「人文・社会科学研究をどのように評価するか」

・日時：2016 年 3 月 27 日（日）13 時から 18 時まで

・場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育講義 B 棟 1 階 118 教室

(2) 科学技術社会論夏の学校 2016「科学を表現する、科学で表現する」

・日時：2016 年 7 月 29 日（金）～31 日（日）

・会場：ビジネスホテル ルートつくばおよび筑波大学 健康医科学イノベーション棟 8F 講堂

2. 2016 年度会計報告（会計：中村征樹、会計監査：東島仁）

・次頁参照

3. 2017 年度事務局人事

代表：東島仁 事務局長：菅原裕輝 庶務（郵便物管理）：中村征樹

名簿管理・ML 管理：森下翔 Web 管理：夏目賢一

夏の学校実行委員長：清水雄也 ドメイン管理：中村征樹

Newsletter 編集：菅原裕輝・江間有沙 会計：中村征樹 会計監査：東島仁

企画委員：江間有沙，八代嘉美，宮本道人，加瀬郁子，標葉隆馬

4. 2017 年度事業計画

(1) 研究会「自律システムの議論の枠組みを考える」

・日時：2017 年 7 月 29 日（土）午後 3 時～6 時（開場 2 時半、懇親会 6 時から）

・場所：日本科学未来館 7F コンファレンスルーム水星

(2) STS Network Japan 夏の学校 2017「科学と修辞—専門知コミュニケーションのデザインに向けて」

・日時：2017 年 9 月 13 日（水）～15 日（金）

・場所：長野県大町温泉郷

その他、シンポジウムや研究会を開催予定。

5. 2017 年度予算計画

・次頁参照

2016 年度決算
STS Network Japan 事務局

※ () 内の金額は、2016 年度予算の金額
なお、2015 年度総会～2016 年度総会前までを会計年度の区切りとしています。

【収入】(2016.3.26～2017.7.28)

前年度繰越金	616,241 円
会費	4,000 円(100,000 円)
Yearbook 売上	0 円 (0 円)
年度小計	4,000 円(100,000 円)
合計	<u>620,241 円</u> (716,241 円)

<< 支出 >> (2016.3.26～2017.7.28)

News Letter 発行・発送経費	0 円
(※ PDF での配信に移行のため)	
シンポジウム・総会・研究会経費	79,000 円(200,000 円)
(※ 2016 年シンポジウム講師謝金・旅費・懇親会補助として)	
通信費	972 円 (1,000 円)
(※ 振込手数料)	
雑費 (封筒・文具等)	0 円 (1,000 円)
Web 関連経費	5,788 円 (4,000 円)
(※ ドメイン・サーバー代 (2 年分))	
夏の学校補助(2016 年分)	93,732 円(100,000 円)
夏の学校補助(2017 年前渡金)	30,000 円 (0 円)
年度小計	209,592 円 (342,000 円)
次年度繰越金	410,649 円
合計	<u>620,241 円</u>

夏の学校関係会計報告 (作成者: 木村匠)

※ 2016 年度は「科学技術社会論夏の学校 2016 実行委員会 (代表: 宮本道人)」主催の「科学技術社会論夏の学校 2016」への共催という形で実施し、共催団体として講演関係費用 (講師謝金・交通費、贈答品)、学生参加費補助 (遠方交通費補助) について支出した。以下はその内訳である。

講演関係謝金・交通費、贈答品	48,732 円
学生参加費補助 (遠方交通費補助)	45,000 円
(5,000 円×9 名)	
合計	<u>93,732 円</u>

2017 年度予算
STS Network Japan 事務局

【収入】(2017.7.29-2018.3)

前年度繰越金	410,649 円
会費(2,000 円×400 人)	80,000 円
Yearbook 売上	0 円
年度小計	80,000 円
合計	<u>490,649 円</u>

【支出】(2017.7.29-2018.3)

シンポジウム・総会・研究会経費	100,000 円
振込手数料	1,000 円
雑費 (封筒・文具等)	1,000 円
Web 関連費	4,000 円
夏の学校開催補助	70,000 円
(30,000 円分について前渡金として支出済のため)	
年度小計	176,000 円
次年度繰越金	314,649 円
合計	<u>490,649 円</u>



編集後記

今号は、2016年度と2017年度の合併号となりました。内容は、2016年度の春のシンポジウムと、科学技術社会論夏の学校2016、2015年度総会と2016年度の総会の内容についての報告になります(YS)。

Newsletter Vol.27 (通巻 No.78)

2017年11月10日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter 編集委員会

代表 菅原裕輝

委員 江間有沙

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 東島仁

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

大阪大学 全学教育推進機構

中村征樹研究室気付

E-mail: office@stsnj.org

URL: <http://stsnj.org/>